

少年兵「護郷隊」の 沖縄戦(3)

米軍は四月三日には沖縄島を南北に分断し、主力部隊を第三十二軍司令部のある首里方面へ、一部の海兵師団は北部占領にむけて北上します。日本軍航空基地である中・北飛行場は米軍に制圧され、後退してきた特設第一連隊の諸隊が石川岳に集結してきます。谷茶付近への米軍の進出に対し、第二護郷隊岩波隊長は米軍との正面での戦闘を避け、遊撃戦を計画していましたが、石川岳が後退の日本軍と交錯する地点となるため、恩納岳へ移動します。そして、東西の県道を縦貫し、制圧をすすめた米軍の金武、恩納の弾薬庫などの拠点の奇襲攻撃を命じます。

その結果、米軍兵士の戦死、戦車、装甲車、ドラム缶、弾薬庫破壊などの「戦果」を出していきます。元隊員の方は「斬り込みで、爆薬を持って行く。バーンと照明弾が上がって、細かい砂まで見えるくらい明るい。三十分ほど銃撃が続いた。(こわくて)もう動けないん

です。」(大宜味村…十八歳)、「突撃というのは、爆薬をおいて、点火して、帰ることです。米軍もビール缶を引っ掛けているわけですね、それに引っかかって音が出て、攻撃されたんですね」(越來村…十七歳)と当時の遊撃戦の実態を振り返ります。

このような中、第二護郷隊の根拠地である恩納岳を中心に米軍からの攻撃が激しくなり犠牲者、負傷者が続出していました。

「自分と五mくらい離れていたところに突然迫撃砲が落ち、隊員の頭がなくなつて(あの)下だけが残つて即死した。あれ見たら、もう震えて」(美里村…十八歳)

「炊事場で食糧を運んでいるときに砲弾が落ちてきて、自分も吹き飛ばされ砂をかぶつた。二〇mほど先に二〇代前半の女性が大怪我をして倒れていて、軍病院に運んだが、そのあとどうなったか、今でも思い出す」(国頭村…十七歳)

護郷隊は次第に激しい米軍の攻撃にさらされ、追い詰められていきました。

約二ヶ月間の戦闘の中で、死傷者が続出し、

名となっています。恩納村では第一護郷隊に召集され戦死した隊員は五名です。編さん室では二十六名の隊員の方から証言を聞き取り、本編編さんの際にはその証言や史料をもとに、一〇代の少年たちが巻き込まれた実態と恩納村の戦争を明らかにしていきたいと考えています。(瀬戸)

注1 第四遊撃隊第四大隊史実資料(沖縄戦関係資料閲覧室)

《参考文献》

- ・『語り継ぐ戦争 第3集やんばるの少年兵「護郷隊」〜陸軍中野学校と沖縄戦』(名護市教育委員会文化課 市史編さん係 二〇一二年三月)
- ・「沖縄の少年兵 護郷隊」『歴史地理教育』(二〇一六年八月号)
- ・「戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦」(防衛庁防衛研修所 戦史部 一九六八年一月)
- ・「恩納村民の戦時物語」(「恩納村民の戦時物語」編集委員会 二〇〇三年八月)

★文中で引用した証言は恩納村誌編さん室で体験者の方から聞き取りした証言を反訳したものです。



「少年護郷隊之碑」(第一護郷隊:名護市大西)



「少年護郷隊之碑」(第二護郷隊:恩納村安富祖)



安富祖の少年護郷隊之碑のそばに第四十四飛行場大隊之碑があります。昨年十月十六日、戦没者として刻銘されている東鎮男さんの甥である東輝男さんが岡山県から来訪され、村誌戦争編専門委員の眞嗣長さんと現場までご案内しました。東輝男さんのお話によれば東鎮男さんは当時二〇歳で召集され、沖縄に移動し、中飛行場(嘉手納)建設に当たります。国からの公報では四五年四月十八日恩納岳にて戦死とのことですが、今もなお遺骨は不明です。東輝男さんは今回はじめての来沖で平和の礎で刻銘を確認し、恩納村に来訪しました。「二十歳の若さで死んで、何もできなかったおじのことを考えると何ともいえない」と無念の思いをにじませ、碑の前で何度も手を合わせていました。